

今年度は中央教育審議会から「これからの我が国の道德教育の在り方について」の答申がなされ、道德教育にとつて特別な年になりました。

各学校が今まで以上に力を入れて道德教育を行うようになることは大変喜ばしいことであります。ただ手放しで喜んでばかりはいられない心配な点が「答申文」に見え隠れしています。それは、例えば次のような記述で、今後学校に誤解が広がるのではないかと懸念しています。

〈その1〉

道德の時間において、**道德的習慣や道德的行為に関する指導を一切してはならないということではない**。道德の時間においても、道德的価値の自覚に基づき、道德的行為を主体的に選択し、実践するための資質・能力を育む上で効果的と考えられる場合には、児童生徒の発達の段階を踏まえ、必要に応じ、例えば、基本的なマナー、人間関係の形成やコミュニケーションの在り方などの**道德的習慣や道德的行為について、その意義を含めた指導を取り入れることがあってよい**。

(7ページ)

〈その2〉

指導のねらいに即し、適切と考えられる場合には、「特別な教科 道德」(仮称)において、**道德的習慣や道德的行為に関する指導、問題解決的な学習や体験的な学習、役割演技やコミュニケーションに係る具体的な動作や所作の在り方等に関する学習などの指導を、発達の段階を踏まえつつ取り入れることも重要である**。

(11ページ)

本当にそれでいいのでしょうか…。

我々は今日まで、「道德教育は学級経営を基盤にして学校の教育活動全体を通じて行う。さらに、道德の時間では内面的な資質である豊かな道德的実践力を養う」ことを行ってきました。そして、道德の時間はもとより、あらゆる教育活動を通してそれを実証し、確信に変えてきました。このことを、例えば指導内容の2.(2)の指導でいうならば、「道德の時間はお年寄りや身体の不自由な人に席を譲りましょうと教える時間ではない。席を譲らずにはいられない気持ち(心)を育てる時間だ。」と。

しかし、先ほど述べた答申文の内容はいかなものでしょう、まるでそれが逆転してはいないでしょうか？

いずれにしても人間の表面だけを操るような軽薄な指導や即時即効性ばかりを求める指導が横行し、道德教育が混乱しないことを切望します。

その意味で都小道研の存在意義は今後益々重要になってくると思います。本会の研究は上手な授業のための単なる指導方法の研究や授業の巧みさだけを求める研究に陥ってはならない、人間とは何か、子供とは何か、道德とは何かという根本問題を常に念頭において進めていってほしいと希望します。

本物はいつまでも瑞々しく、色あせることはありません。本物を追求し続けければ、それは滅びることはなく、必ず認められ、評価されると思います。

本会の研究活動に大いに期待してOB会の挨拶といたします。